

(様式D-2)
(別 紙)

令和4年度 海外派遣研究員研究報告書

令和5年5月9日

日本大学理事長 殿
日本大学学長 殿

所 属 法学部
資格・氏名 准教授 松山 博樹

令和4年度海外派遣研究員（短期B）の研究実績を、下記のとおり報告いたします。

記

1 区 分 短期B

2 研究課題

James Joyce を代表とするモダニズム文学におけるヨーロッパ精神文化の受容に関する調査

3 派遣期間 西暦 2023年2月13日 ～ 2023年3月14日

4 派遣先 (国名)イギリス、フランス (都市名)ロンドン、エディンバラ、パリ

5 研究目的

本研究は、アイルランドの作家 James Joyce (ジェイムズ・ジョイス) の文学作品と、その人生模様を、多様な視点から分析することによって、ジョイスを代表とするモダニズム文学におけるヨーロッパ精神文化の受容について、現代思想に基づき、社会学的、歴史学的見地から、通時的かつ共時的に考察することを目的とした。

6 研究概要

ジョイスがアイルランドを離れて以降、滞在したロンドン、パリにおいて、記念館や図書館、大学、出版社等の専門機関を訪問し、現地研究者に対する聴き取りや資料調査、文献収集を行った。専門領域を同じくする研究者間の国際的、かつ、横断的な最新情報の交換や、現地で資料、文献収集を行うことは、当該研究に必要不可欠であり、また、今後の文学研究分野にも大きく寄与できるものと考え、現地での研究に取り組んだ。

7 研究結果・成果

本研究においては、20世紀初頭のアイランドの作家ジェイムズ・ジョイスのヨーロッパにおける歩みを辿り、現地で多様な資料を収集、閲覧、あるいは取材を行うことにより、彼の文学作品が、複雑な家族関係や家族の役割、そしてヨーロッパの文化的な背景との関係性を探求していると結論づけることができた。

例えば、ジョイスの作品は、実際の家族との関係性や経験からインスピレーションを受け、父母との愛や葛藤、対立などが描かれていることが分かった。特に、*A Portrait of the Artist as a Young Man*(1904)、*Dubliners*(1914)、*Ulysses*(1922)などの作品では、家族との関係や家庭環境によって形成される主人公のアイデンティティの問題が取り上げられている。実際のジョイスの父は、厳格なカトリック教徒であり、アルコール依存症の問題を抱えていた。彼は職を転々とし、家族を経済的に支えることに苦勞したが、ジョイスの作品においても、そのような姿勢や信仰心、経済的な困難が主人公の父親に反映されている。ジョイスの母は、作品においては、家族の絆や愛情の象徴として描かれている。ジョイスは母親への深い愛情を終生抱き、彼女の犠牲的な存在の記憶が彼の作品に大きな影響を与えたと考えられる。

さらに具体的に考察すると、*A Portrait of the Artist as a Young Man*では、主人公と父母との関係が描かれているが、そこには、個人の芸術的な探求と家族関係の矛盾に直面し、内なる衝突や自己のアイデンティティの形成に苦悩した実際のジョイス自身の姿が見出すことができる。*Dubliners*でも、主人公が自己の感情を抑圧し、家族や社会の制約に縛られる姿が描かれる。これはジョイス自身の経験や感情を反映させていると解釈することができ、家族の影響と個人の成長の間に生じる葛藤を描き出しているものと考えられる。さらに、*Ulysses*でも、主人公と両親との関係が描かれており、母親の死による喪失感や、父親の影響に対する複雑な感情を抱えながら、主人公は自己のアイデンティティを模索する。これらの作品では、ジョイス自身の父母との実際の関係性が反映されており、家族の絆や個人の成長における父母の大きな役割が探求されている。このように、彼の描く家族関係は、時には愛情や連帯感に満ち、時には葛藤や不和に満ちたものであり、個人のアイデンティティ形成に重要な要素となっているものと考えられる。家族の中での愛、不和、制約、欲望などの感情、家族の関係性の複雑さや困難さを赤裸々に描写し、家族が個人のアイデンティティや成長に及ぼす影響を深く探求している彼の作品は、家族の問題が人間の普遍的なテーマであり、家族が社会の基本的な単位であることを示唆しているものと結論づけることができるだろう。

また、ジョイスの作品は、ヨーロッパの文化的背景、社会的変化を反映しているものと考えられる。*Ulysses*においては、ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』を始めとしたヨーロッパの文学的伝統との間テクスト的關係を展開しているが、ジョイス自身と同時代、あるいは時代を前後するフロイトの精神分析学やニーチェの哲学といったヨーロッパの知識体系との思想的交流を通じて家族の問題を深化させているとも解釈できる。特に、ジョイスが生きた時代、19世紀末から20世紀初頭に

(様式D-2)

かけて、アイルランドの独立運動や第一次世界大戦といった重要な出来事が発生し、ヨーロッパは急速な変革の時期にあった。例えば、モダニズムを始めとして、芸術、文学、哲学などの分野で新たな思考や表現の形が模索されていた。このような時代にあつて、ジョイスはロンドンやパリを始め、ヨーロッパ各地を転々とし、ヨーロッパの多様な文化や思想に触れる機会を得た。そのような中で、ジョイスはヨーロッパの文学や思想の伝統に根ざし、それを独自の文体や表現手法で表現したのだが、特に *Finnegans Wake*(1939)では、ヨーロッパの多様な文化や歴史的な関係性が反映されている。この作品では、家族の問題やアイルランドの抱える歴史的、社会的な不満、そしてヨーロッパ全体の文化的な軋轢が浮き彫りにされ、アイルランドの独立運動や第一次世界大戦を始めとしたヨーロッパの社会的な変動や文化的な転換に対するジョイスの大きな関心を示しているものと考えられる。彼の作品は、個人の内面と社会的な環境、家族の問題と社会の変動との相互作用を通じて、ヨーロッパの歴史と文化の一部として位置づけることができるだろう。

また、ジョイス自身が成育の過程で背景として身につけたケルト文化の影響は最も大きいものと考えられる。ジョイスはケルト語の一種であるアイルランド語やアイルランドの方言を巧みに使用して、アイルランドの文化的な特徴を作品に反映させている。その作品には、アイルランドの独自の言葉遣いや口語表現が取り入れられており、アイルランドのケルト文化の一端を伝えている。また、ジョイスの作品には、アイルランドの伝説や神話もしばしば登場する。例えば、*Ulysses*では、主人公が、アイルランドの伝説や神話に触れながら一日を過ごす。また、その他の作品においても、ダブリンの街並みやアイルランドの民俗行事、宗教的な儀式などがリアルに描かれており、読者はアイルランドのケルト文化の一端を垣間見ることができる。これらはすべて、彼の生育環境の背景にあつた文化である。

以上より、ジョイスの作品は家族の問題とヨーロッパ精神文化の受容を探求し、現代の読者にも多くの示唆を与えていると結論づけることができた。彼の作品は家族の内部での関係性、家族と社会との相互作用を通じて、人間の存在やアイデンティティ、社会的な規範や価値観の問題に迫り、ヨーロッパの文学や思想の伝統との対話を通じて、現代社会における家族の問題や文化的な課題を浮き彫りにしている。ジェイムズ・ジョイスの作品が持つ価値や意義は、このような社会学的および歴史学的な分析を通じてこそ、今後もより深く理解することができるだろう。

以 上